

ハンドアウト（出品内容）

MIKA NINAGAWA

蜷川実花展——富山県美術館開館5周年記念

2022年3月19日(土)-5月15日(日)

開館時間 9:30-18:00(入館は17:30まで) 初日3月19日のみ11:00開場

休館日 毎週水曜日、3月22日(火) ※4月28日(木)-5月10日(火)まで無休

※3月25日(金)、26日(土)、27日(日)は夜間延長開館(20:00閉館)

主催 富山県、蜷川実花展実行委員会(富山県美術館、北日本放送)

協力 ラッキースター、小山登美夫ギャラリー、NAGISO

特別協賛 アクタス富山

後援 北日本新聞社、富山新聞社、読売新聞北陸支社、朝日新聞富山総局、

毎日新聞富山支局、北陸中日新聞

会場 富山県美術館 2階展示室(展示室4→3→2)

Toyama Prefectural Museum of Art and Design/March 19 - May 15, 2022

[注意事項]

・本リストの掲載順と展示順は必ずしも一致しません。

・作品、展示物・展示機材にはさわらないでください。

・展示室は全て撮影可能です。

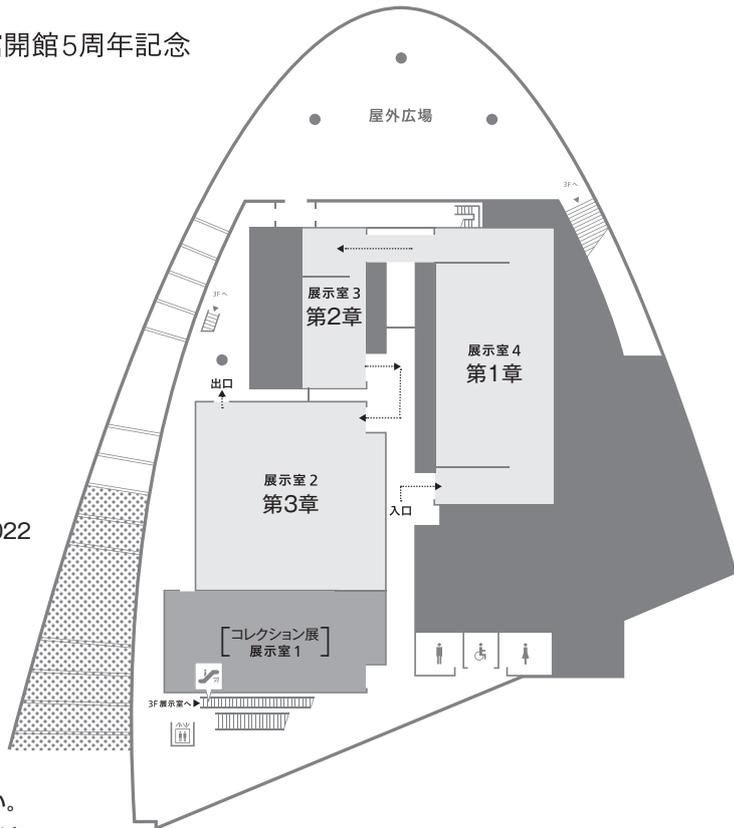
・撮影については、マナーを守ってください。(本誌裏面参照)

撮影された写真はSNSでのシェア可能です。

#蜷川実花展富山、#mikaninagawa、#富山県美術館をつけてご活用ください。

・体調不良などをのぞき、企画展は再入場できませんので、あらかじめご了承ください。

Photography and use of SNS are allowed in this Mika Ninagawa special exhibition.



展示作品 ©mika ninagawa Courtesy of Tomio Koyama Gallery

3階図書コーナー(無料スペース)でも、蜷川実花作品が放映されます。是非ご覧ください。

第1章 2000年代からの代表作

《Acid Bloom》(アシッド・ブルーム)

同題名の写真集・2003年出版。

花に接近して撮影することで生じる色彩の揺れや普段目にすることができない色やグラデーション、形態など、日常にある未知の世界を蜷川らしい切り口で見せている。デジタルではなくフィルムでの撮影にこだわり、色の編集を一切行わずに生まれる鮮やかな色彩が蜷川作品の特質であることを多くの人が知ることになった代表的なシリーズ。「花を撮るという行為は、私にとって、花以上のなにかになること。」「良い写真が撮れるとき、私は必ず、この世とあの世の境目のような、無意識な宙ぶらりんなどところにいる。」と、被写体と同化するかのようになり、自らの枠を超えて、創造する瞬間をとらえた言葉をこの写真集に寄せている。

《Liquid Dreams》(リキッド・ドリームス)

同題名の写真集・2003年出版。

蜷川が好むモチーフの一つである「金魚」を捉えたシリーズ。私たちの身近な存在でもある金魚は、人間の鑑賞のために養殖され、自然界では見られないような形態に姿を変えられたものである。人間の飼育下でしか生きることができない金魚は、愛らしさや華やかさだけでなく、人間の欲望によって左右された儂い存在、ひいては人間のエゴの象徴として登場していると考えられ、蜷川らしさが際立つ作品群といえる。

《永遠の花》(えいえんのはな)

同題名の写真集・2006年出版。

メキシコの墓地でみた、死者に手向けられた造花を契機に撮影したシリーズ。英語のタイトルはEverlasting Flowers(エバーラスティング・フラワーズ)。造花ならではの、あでやかな色彩を画面に大胆に配した点が特徴。蜷川は「永遠に枯れない花を死者に手向ける。人の思いを乗せた時、その造花は生花よりも生命力に溢れているように感じる」と語る。被写体の花々に込められた人間の思いや、その風土への深い洞察が作品の根底にある。

《Flower Addict》（フラワー・アディクト）

同題名の写真集・2009年出版。

菊の花に着色した水を吸わせて、人工的に色づけた花弁をクローズアップして撮影したシリーズ。赤・オレンジ・緑・青と現実世界にはありえない奇抜な色に染まった菊を、さらに密集させて撮影した本作品群には、色彩と構図への蜷川の大胆な挑戦と自身の色彩感覚を信じる力強さが感じ取れる。

《noir》（ノワール）

同題名の写真集・2010年出版。

「ノワール」はフランス語で黒を意味する。「黒の中には色が溢れ、色の中には黒が潜む」など蜷川らしい言葉が写真集に寄せられている。愛らしい動物や人形など、映しとられたものたちが暗闇の中でうごめくような不気味さ、シュルレアリスムの傾向や蠱惑的な面が窺える。それまでの強い色彩と生命力に溢れる蜷川作品の特徴や世間のイメージとは違った、色彩と生命力の裏側に常に潜む影と死を捉えたシリーズで、発表時に話題となった。

《桜》（さくら）

同題名の写真集・2011年出版。

2011年3月、東日本大震災により非現実的な光景が広がり、異常な日常が繰り返された時、蜷川は自分のために、自分で自分を支えるために、何かにとりつかれたように1週間で2500枚もの桜を撮影した。桜は蜷川が一番好む花だという。いつもと変わらず咲き誇る美しい桜を撮ることで自分の心を守ろうとした姿勢は、蜷川自身だけでなく時間や地域を越えて、多くの人に響くものだろう。

《PLANT A TREE》（プラント・ア・トゥリー）

同題名の写真集・2011年出版。

このシリーズは、2010年のある日、たった数時間で撮影されたという。出版は『桜』と同じ2011年であるが、生命力に溢れる桜とこのシリーズの桜は、作品の方向性、表現内容が全く異なっている。被写体として桜を撮ろうとしたのではなく、かなり抽象的なイメージで桜が登場している。シャッターを切った瞬間の自分自身の心情を、レンズ越しの花に同化させたかのようにみえる。蜷川には珍しいタイプの心象写真シリーズといえるだろう。

《Self-image》（セルフ・イメージ）

同題名の写真集・2013年出版。

蜷川が写真家としてデビューした1990年代は、いわゆる「ガリー・フォト(女の子写真)」がブームとなり、セルフポートレイトをはじめ、身近な人物や可愛くキツクなものなどを撮影した若手女性写真家の作品が多く発表され、蜷川はその代表的なひとりとして注目された。2000年頃にはその流れから離れ、セルフポートレイトの作品撮影・発表はしなかった。このセルフポートレイトのシリーズは、2000年以降、蜷川が映画制作に携わるようになって復活したもので、断片的な撮影で継続して撮られているものではない。「映画は大勢の人と関わらないと作れないもので、写真はどこまでも自分個人のものである」と蜷川は度々述べる。自己表現の確認の作業として、映画監督としての重責と、自身のバランスを取るために撮影されたものだろうと推察できる。

《Light of》（ライト・オブ）

同題名の写真集・2016年出版。

花火と屋外フェスをモチーフとした作品で、光を求めて手を伸ばす人々と、光がテーマとなっており、当時の時代の空気をよく反映したものになっている。夜空に鮮烈な光を放ちつつ消え去る花火、強い照明のもと音楽に熱狂した人たちが高く伸ばす手、その熱気を含めた一瞬を撮影している。このシリーズでは、若い人たちの現実世界への絶望や諦念を感じ取り、それに共感するでも迎合するでもなく、一定の距離を取って見つめている蜷川自身の視線を感じることができる。

《earthly flowers, heavenly colors》（アースリー・フラワーズ、ヘブンリー・カラーズ）

同題名の写真集・2017年出版。

美術評論家・松井みどり氏が蜷川の写真を評した「地上の花、天上の色」の英訳を写真集のタイトルとした。モチーフは、撮影場所や季節を限定することなく、自然の生花か人工の花かも問わない様々な花であり、蜷川の視線にふれた花たちの群像といえる。近接して撮影した花々が放つ色彩は、デジタル処理など写真の色を加工していないにも関わらず、鮮やかで、構図も大胆である。蜷川のレンズが捉えたこの世のものとは思えないほど美しい世界は、華やかさや多幸感に満ちている。蜷川の作品の中でも大変人気のシリーズである。

第2章 2021年以降の新作

第3章 初公開の映像インスタレーション

写真撮影のお願い

- 「密」を避け、マナーを守って楽しんでください。○商用目的の撮影、フラッシュ・三脚・自撮り棒を使用しているの撮影はご遠慮ください。
- マスクを外す、大声で話す、連続シャッター音を出す、小物を置くなど、他のお客様の鑑賞の妨げになる行為はおやめください。
- 許可なく他のお客様を撮影しないでください。○写真の撮影・利用は撮影者の責任において行ってください。主催者は一切の責任を負いかねます。